



岡本浩一氏を偲んで

岡本浩一先生の思い出

古林 徹

kobato333@hera.eonet.ne.jp

お互いを「先生」と呼ぶ大学に長く居たことから、尊敬の念と親しみを込めて、使い慣れた「先生」と書かせて頂きます。岡本浩一先生は、1929年5月19日にお生まれになり、2016年4月22日、享年86歳でご逝去されました。

先生のご経歴から、幅広い分野の人々と交流がありましたことは容易に想像できました。シグマ委員会の医学用原子分子・原子核データWGの中だけでも、多くの関係者がおられますので、追悼文の依頼を受けた時は、私で良いのだろうかという思いから躊躇しました。しかし、先生のことを書かせて頂くことは、私にとって、とても光栄なことですのでお引き受けさせて頂きました。

私が先生のご逝去を知ったのは4月22日の夕方、早苗奥様からのお電話でした。ここ数年、体調が優れないことからお目にかかれていませんでしたが、お元気と聞いておりましたので、突然の知らせにショックを受け、咄嗟に信じたくないと思いました。私の定年退職後、今までと違う視点と発想から1年ほど模索してきたことを、先生に聞いて頂きたいと思っておりましたので、無理してでもお話しさせて頂くようにすべきだったと後悔しました。残念でなりません。4月27日、28日のご葬儀に参列させて頂きましたが、奥様をはじめご家族の皆様のご様子から、先生がご家庭内でも、とても愛されておられた存在であったと感じました。

先生と私は、丁度20歳の年齢差（父と息子ほどの差）があります。ある年齢を過ぎると、父の経歴に興味を持つようになりますが、実父の場合でもそれを知ることは、難しいことが多いと思います。そこで、原子力システム研究懇話会から2010年に発刊されたNSAコメンタリーシリーズNo.18（原子力システム研究懇話会20周年記念号）に、先生が書かれた「昔話そして未来へ」を参考にご経歴を紹介させて頂きます。

岡本浩一先生は、旧日本原子力研究所（原研）に在職中、1956年9月から2年間、第一回原子力留学生としてノルウェーに、さらに1970年9月から4年間フランスのOECD（NEA）に出向されました。1974年9月末に原研を退職され、同年10月から1990年3月まで、16年間オーストリアにあるIAEAの正規の職員として勤務され、定年退職されました。1990年に帰国された後は、旧原子力産業会議（1996年まで）、原子力システム研究懇話会に所属されました。また、法政大学、日本大学の非常勤講師を75歳まで勤められました。このように先生は、IAEAを拠点にされて、日本だけでなく世界の原子力の研究開発を推進した、数少ない先駆者のお一人と思います。

私が最初に岡本浩一先生のお名前を知ったのは、1975年3月にウィーンのIAEAで開かれた「Advances in Biomedical Dosimetry」会議に参加した時でした。私は、1972年4月に京都大学原子炉実験所（京大炉）に入所し、ホウ素中性子捕捉療法（Boron Neutron Capture Therapy : BNCT）関係の物理工学的な研究に携わらせて頂いていたことから、関係者の一人として参加していました。会議前の打ち合わせで、故 西脇 安先生から「とても面白い日本人がIAEAにいます」というような表現で先生が紹介されたと思います。結局、このときはお会いすることが出来ませんでした。10年後の1985年に東京で開かれた第二回中性子捕捉療法国際会議の後、京大炉を訪問された先生と、初めてお目にかかりお話を伺いました。別れ際に、満面に笑みを浮かべながら、大きな目で私を見つめて「放射線の平和利用にBNCTは大きく貢献できるので頑張ってください」と言われたことが、強く印象に残っています。

先生と私の関係が深まったのは、1992年から医学用原子分子・原子核WGの委員、さらに、先生の意向に沿うように決まったと感じましたが、委員の互選で選ばれたWGリーダーを2000年に拝命させて頂いたことでした。定期的に委員会でお会いし、先生から示唆に富んだ、興味深いお話を聞くことがとても楽しみでした。東京出張をした時には、少なからず田園調布のご自宅を訪問させて頂き、奥様も交えてお話を伺ったことが懐かしく思い出されます。

先生から伺った数多い様々なお話しの中で、私にとって印象的なものは、海外の仕事に興味を持った2003年前後に伺った次の2つでした。一つは「世界の標準英語はブローケン・イングリッシュ」というもので、英語に大きな苦手意識を持っていた私は、根拠は乏しいのですが、妙な自信を持つことができました。もう一つは「海外の組織で働くときは、建前と本音をしっかり理解して行動することが重要」というものでした。真理を追求することに拘り続けていた当時の私は、「人間社会には不可解さや不思議さが現存する」ことを教えて頂いたと感じました。「人間とは、そして自分とは何か」という、思春期に持った疑問を再び意識するようになりました。

2002年は、忘れられない年になりました。それは、先生と一緒にさせて頂いた2003年6月に発刊されたNSA コメンタリーシリーズ No.11 の編集作業でした。この年のコメンタ

リーは、原子力システム研究懇話会の中で先生が主導することになっており、早い時期から編集の手伝いの打診を受けていました。当初に提示された内容が「核データ関係」でしたので、先生のお役に立ちたいという気持ちはありましたが、即答できませんでした。この時期が私の人生の大きな転換期であったこともあり、時間だけが過ぎていきました。私は4月に精神的に不安定になりましたが、9月中旬に第10回中性子捕捉療法国際学会が終わった頃には落ち着きを取り戻していました。コメンタリーを出せるかどうかの判断のぎりぎりの期限といわれた9月下旬に、先生からコメンタリーの内容を「放射線の利用関係に変更します」といわれて決心ができました。本のタイトルを「放射線と先端医療技術」とし、それに沿った内容で構成を検討し、章割り、執筆者の選定、執筆者の内諾など、先生と二人で進めた事前の準備が整ったのは12月初旬でした。1週間後に正式の原稿依頼をしましたが、原稿の締め切りは45日後の2003年1月末という短期間でした。3月下旬までに印刷に回す作業工程に沿ったものでしたが、結果として、21人の執筆者と関係者の温かいご理解に支えられ、3月初旬には全ての原稿が整い、予定通りの期日に発刊できました。編集と印刷の作業は、エネルギーレビュー誌編集長の金木雄司さんのご協力を得て進めました。この年は、一人の人間の弱さと、集団の力のすごさを、合わせて体験させて頂き、一期一会の大切さを実感する機会が、先生から与えられたと感謝しています。

個人的な先生との思い出をお伝えさせて頂き、筆を置きます。2004年7月20～31日、先生ご夫妻と私の妻の4人で、ウイーンとスコットランドを旅行しました。先生が大好きな古城が多くあるスコットランドは23～30日の7泊8日をかけました。エディンバラ空港からレンタカーをして、東海岸を北上し、ダンディー、アバディーン、インバーネス（ネス湖）、スカイ島と反時計回りで再びエディンバラに帰る、総走行距離900kmのドライブ旅行でした。1泊目以外は同じ場所で2泊して、夏期は遅い時間まで明るいことを加味して、体力的に無理がかからない旅行計画にしました。奥様のナビに従って、合わせて20以上の古城を訪れましたが、古城見物が初めての私たち夫婦に、何度も訪れておられてポイントを知っておられる先生は、とても分かりやすく解説してくださいました。ダン・ブラウンの著書「ダ・ヴィンチ・コード」で有名になった、ロスリンチャペルを訪れた時の先生の興奮ぶりは印象的でした。古城見物と合わせて、ウイスキーの蒸留工場、牧場、大自然、童話の舞台になった町なども楽しみました。

帰国後、何度も話題になったことは、数十台のオートバイの集団から中央線をはみ出した1台と正面衝突寸前まで行った時のことでした。坂道を登り切った所で遭遇しましたので直前までお互いが見えず、相手が道端方向にハンドルを切ったのを見て、反対方向のオートバイの集団が来ている中央線側へ車を少し移動させて、辛うじて難を免れました。日本と同じ左側走行だったこと、日頃から想定していたことが功を奏したと思いましたが、何かに守られていると感じました。

先生の数々のお話から、人生にはその人しか持ち得ない宿命のようなものがあると感

じました。先生を思い出す言葉の一つに「異端」がありますが、私にも通じる所があると感じています。故人は生きている人の意識の中で生きていると信じます。尊敬の念と親しみを込めて、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



写真左：庭園が有名なコーダー城。

写真右：ロスリンチャペルの有名な柱。

(2004年7月筆者撮影)